

注解『七十一番職人歌合』稿(八)

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第十九番および第二十番の注解を収めた。

十九番 紙漉 賽磨

【職人尽】

〔五番本 東北院職人歌合〕四番右 博打

おほつかなたれにうち入て月かけのくもの衣をぬぎてゐる覧

我こひはかたおくれなるすくろくのわれても人にあはんとそおもふ

月

左右ともに優に聞え侍。右、いますこし我身に思知られたる所あり。右勝にや侍らん。

恋

……右、たより面白く侍。持と申へし。

〔十二番本 東北院職人歌合〕九番左 博打

注解『七十一番職人歌合』稿(八)

おほつかな誰にうちいれて月影の雲のころもをぬきて見ゆらむ

左、我身をつみてたれにうち入るとよめる心さし、はかなくきこえて、これも一つのすかた也。……仍右可為勝。

わりたてゝきほひはてたるいりかねのあはしとすまふこひもするかな

左、なたらかに聞え侍り。……依以左為勝。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕四番左 さいすり

一か二かめもきえはつるつふれさいわれたに見ゆる秋のよの月

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕博打 当たり目のはづる時は負け博打賽をば採まで身をや採むらん 〔吾吟我集〕寄紙恋

鳥の子を十重づつ十重は重ぬとも思ふ言の葉文に尽きめや 寄双六恋 よき目をとこひねがへども双六のさいは

ひなくてあはぬ独り寝 双六の習ひ始めは賽の目の一をもつてぞ知る盤の上 紙 鳥の子に大鷹小鷹引き合は

せ使ひあかぬは料紙なりけり 〔職人絵合詩〕九番左 博奕打 双陸骰盤賭万縉 画欄紅紫闘争頻 梟盧叱々賢乎已

贏得世間無用人 〔古今夷曲集〕博奕によせて行末をたのむ恋を 賽ともにふりぬる君がなびきなばかるた結びの帯解

きて寝ん久清 双六 川舟をのほすに似たり双六はさいつひいつに手の暇がなひへ行風 博奕師 負け

ぬればくれぬ物とは知りながら猶うかうかと打つ博奕哉満永 双六好きなる人のさはる事ありて久しくまから

ぬなど消息しける返事に 双六のさいさいござれでつくりと居座る床をおりはしつつも信海 〔後撰夷曲集〕寄

双六恋 双六の引く手に寄りつ中切りつ競ひ後れを見する君かな養三 播磨にて双六を見て 双六のよき手し

かまのちちたしと目見たし肘をはりまがた哉良因 さいさいの乞ひ目も出でぬ双六に気骨折羽をうつつけ者かな

△重勝 〔銀葉夷歌集〕寄帟恋 君と我ながく契りを那須野なるあひよし紙のあらん限りは信海 寄双六恋

賽の目の見知らぬ人の袖引けば物すご六のだうぞ震へる△政栄 双六のさいかく者と及ばぬは石より堅き人の心根

△梅朝 賽ならば五三の裏の恋といはん四の二物をぞ思ふそれがし△宗兼 〔大団〕寄紙恋 頼むなり此の世で逢

はずはあの世でと思ひすぎはらのかみも仏も 〔人倫訓蒙図彙〕紙屋 諸国より出だす。名物品々あり。仏在世にはいま

だ紙なくして、多羅葉に書き給ひしと也。唐土にては竹を割りて字を彫りつけしとなり。記私といふ者初めて作りけるとかや。日本にても木に書きけるゆへ、書札を呼んで木札といひしとかや。／ 箆師 双六の箆、これを作る。所々に住す。(狂歌種ふくべ) 寄紙神祇 祈りなば厚き恵みにあを土佐と歩みを運ぶかみの森下へ流水(「誹諧職人尽」) 紙すき 薄氷上手にすくや紙屋川へ徳元( 紙すきのはたはた嬉し谷の花へ琴風( かみすきの手妻や美濃に散る紅葉へ好古堂 以貫( 紙すきや日脚覚える冬至過ぎへ備中成羽 素道( かみすきのはたはた寒しから衣へ水府 沾橋( 紙すきや流るる花に春をしみへ全 苦夕( すき出す紙に五色のはなちどりへ全 遊璣( 梶の葉の秋や紙漉墨田川へ嘉延( 御祓川すゑや紙漉ゆふだすきへ栖霞( かりがねや灯のもる家に紙きぬたへ敬中( 心には花をさるふや芳野紙へ田社( かみすきや水の中うつ小夜きぬたへ松巴( 紙すきの里や礎の夜のあまりへ竹阿( かみすきの手妻に早き小鮎かなへ巴洲( 散る花や塵を漉きこむ紙屋川へ蓮外( なでしこの花のあたりや地紙漉へ万珠( すきあげる紙に残れやほととぎすへ世田谷 今之( 紙漉の目にも芳野やねりの花へ寥和( さいすり 帷子の四五月のさいみかなへ宗鑑( わざとならぬ葉のうら表いちごかなへ青嶽( 賽すりの手からこぼれつ梅のはなへ露斗( さいすりよみがけや年の市のうらへ寥和( 紙漉 追加 しら菊や紙漉く里の朝ぼらけへ砂川堂 涼翠( すき込むやちればぞさくら芳野紙へ伊十( 回文 紙漉よ花見て皆はよき住家へ其月( 紙漉に涼しさとはん窓の顔へ万夫( 紙漉の灯火白し小夜千鳥へ野州足利 鹿如( 花の香や紙に漉きこむ妹背川へ涼花( 浅間根や爰はとろろの花盛りへ魚里( 名月や雲紙すける水にまでへ丈室( 新古誹諧の職人をあつめて、此の職人集よく調へたるをうらやみて 我も恋ひしのぶ紙子や集の主へ全( 今様職人尽百人一首) かみすきし 播磨杉うすの水際つや清くいで切り口を揃ひ合はする

「これはまるいに行くぞ」「大分今日は水際がよい。あすも此の水で用いよう」(彩画職人部類) 紙 聖徳太子、唐土より来れる曇徴といへるものと工夫ありて、はじめて帟を漉く事を得給ふ。それより代々おしうつり、国々の名産、檀紙、奉書を上品として、かぞふるにいとまなし。京都は、紙屋川の流れありて其の職をなす。東都は麻布、関口、或いは今戸、山谷の初嵐の夕べ、何となく淋しき砧は、四季をわかたぬ遠音こそは、ことさらに哀れふかし。(職人尽発句合) 十三番左 紙漉 薄墨の雲すきもるや隴月 帟漉が薄墨といふより隴月と結びたる、張紙のゆへある仕立てに、元

結司が細く捻り出だしたる白髪の寄り合ひは較べがたし。〔職人尽狂歌合〕紙すき 紙よりも今の初音を反古にしてすき返し鳴けやよ郭公 ……右、なべてならぬ口つきなり。かの浅草紙の名にも似ず、心深くもたくまれつるかな。公忠朝臣の、今一声のと宣ひしにも、執心は劣れりとも覚へ侍らず。勝とこそ定め申すべけれ。／ 昏すき 漣きながら咄す言葉の端切らず耳に残りし初ほとゝぎす ……右、端切らずといふ、昏の端つ方のむつかしげなるを、耳に残りしなど申されし、よろしく聞へて侍り。但し、胸句いさゝか事足らぬ心地し侍り。左、またき勝にて侍り。／ 紙すき すき上げし間に合ひに聞く郭公おのれも口の横さげやする ……右、結句の秀句、よろしくめづらかながら、間に合ひと申す詞、いさゝか言ひおふせたりとも覚へぬやうなれば、左勝りぬと申すべきや。／ かみすき 昏すきも一足飛びに出て聞かん横へさけてぞ行く郭公 ……右、あわてゝ走り出たるさまおかし。裂くと避くとの秀句も面白く聞えて侍れば、昏すきの方勝りぬべくや。／ 紙すき いくばくも田は作らねど昏すきのすき返しながら聞く郭公 左、敏行朝臣の、朝な朝な通ふの哥にて続けられし、おかし。……勝負わいたためがたく侍れば、持と定めて侍り。／ かみすき 漣き出だす昏はよし野の御所なれやすを巻き上げて聞く郭公 左、新葉集の風流さも侍るべくや。但し、本末のかしらに、す文字並びたればいかゞなどいふ人も侍るべけれど、ざれ哥はしか毛を吹く疵を求むべき物とも覚へず。……猶、神皇正統記の説によりて、南帝をもて尊し（左勝）とすべくや。／ 筆磨 時鳥鳴く夜寝られず筆磨も一つ伏しては三つ仰向く 左、一伏三仰の文字は、万葉集に見へて諸説侍る事ながら、ここには十訓抄に、わらはへの俯き筆といふことのある由記せるを取りて、筆磨に寄せられたる、甘心せられて侍る。定めて大方の作者にはあらじ。……持とも申すべけれど、歌合に持のみ多からんはすさまじげに思ふ人も侍るべければ、強ひて勝負を分かち侍る。一伏三仰の文字めづらしげに侍れば、いささか勝りぬべくや。／ 筆磨 夕間暮れ筆磨りやめて我が宿の門をも立てず聞く郭公 左右、朝あしたなふ夕の違たがひのみにて、心のおかしさはともに等しく侍れば、持と定むべくや。／ 筆磨 暁の鐘の数さへ廿一目をすりながら聞く時鳥 左、一二の目のみにあらず、五つ六つとは古くより数へし数ながら、それを丑より卯まで数へて申されし、めづらし。……持とや申すべからむ。〔江戸職人歌合〕十六番左 紙屋 照る月を反故ほんごになしつる村雲も又漣き返す夜半の秋風 左右共無三申旨一。左歌、漣き返したらん月影、透る斗隈なくも侍らし。……なずらへて為し侍。

言の葉はなほや残らん鳥の子を十づつ十に文は書くとも 左右又申旨なし。判云、左歌、戯れだちたり。右……尤為勝。〔今様職人尽歌合〕紙漉 月に打つ砵もあはれ添ふものと鼻かむ紙や漉き返さまし 左の歌、あはれを添ふる砵の音は、浅草紙の五条わたり夕顔の宿のはかなきさまも見え、忍びやかに鼻打ちかむは十五夜なりけりとおぼし出だし、須磨の巻のさびしささへ思ひ寄られ侍る。……両首ともに、近頃の凡鄙の体にあらず、いかにも上手の口調なれば、重つ持と定め侍り。しかにてあらずや。「いにしへの修善寺紙といへるも、此の草にこそ」叩かるることも厭はず紙よりすいたる妹にあはむとぞ思ふ。手すきも桜薄様吉野紙とにかく我は花をすくもの。薄紙をへぎ取る春の和らかに花はふくるる漉船のもと。紙を漉く簾を上げてさやかなる月の宿りも舟に見るかな。かたぶける影に姿も丈長と伸びつつ月をめづる紙漉。我が業の紙をば漉かずこのごろは花のみすきと身に入るるかな 暇なみ黄楊の小櫛は手に取らで妻も紙漉くたづきせはしや。咲く花の浪に漂ふ景色かな簾帆かけし紙漉の舟 あはれさは君が心もしら紙やすきと枕の塵も払はず。願ふかみすくせのほどやいかがあらん今にかうぞといふ幸もなく ありがたきことと知りけり塵紙のすぎはひしてもすすまざる身は。すきあうた中は夜な夜な大鷹のたびかさなりてあつくなりけり。漉き返し漉き返しつつ折れども妹が情ぞ浅草のかみ。一盛り花をやりしも塵紙とすかれたる身の老いとなりては 手業にも老いぬる身をや恨むらん揉めたる紙の皺は伸ばせど。〔略画職人尽〕急がれてなす奉書を漉くときは小手にも汗の霰たばしる。〔宝舟桂帆柱〕紙漉 稼ぎさへすれば家内も機嫌よく笑ふ門には福のかみすき。暗いうちから草を叩き、漉き上るまでが大骨なり。紙屋 祥みを恵比須紙屋の賑はひは掛直かたなくして安売り三郎。伊予砵に土佐こよし、くく。〔難波職人歌合〕下八番右 紙屋 我妹児がはこする紙に身を変へて疎む心に成るよしもがな 左の方人云、いかに恋ひわびたりとて、紙にも身を変へて、はこする女の尻に近づき、其のきたなさに恋を忘れんとは、今読むだにも穢らはしくて、人の前にはとらて難きをや。右方答、万葉集の歌に、冀遠くまれ、と詠めるも有れば、きたなしとて何の憚りかあらむ。判に云、万葉集に、上の句を、中々に人とあらずは、と云ひて、下に、くさくの物に身を変へまほし、と云へる歌ども数々あり。是則ち人の真心といふ物ぞかし。又、続世継物語に、藤原の貞文の朝臣は、本院の侍従を恋ひわびて、其

の人のほこしたるを舐めて恋を忘れむとせられたる古きためしもあり。是を仏法には不淨觀といへるよし、慈鎮が閑居の友にも見えたり。皆是せちなる恋心なめれば、外よりはとかう言ふべからねど、歌に詠みてはさすがに聞きよくもあらぬ成るべし。左のあだえて誹諧めきたるも、猶勝たるべし。

## 【本文】

## 十九番

すきかへしうすゝみそめの夕くれも  
しらかみ色に月そいてぬる

一か二かめもきえはつるつふれさい

それたに見ゆる秋の夜の月

左右ともに、我道をふかくいひたてゝ、しかも

月をもてなせり。なすらへて為持。

わすらるゝ我身よいかにならかみの

うすきちきりはむすはさりしを

ねたやけにかたつきしたるゑせさいの

かくかひもなきめをもみるかな

左は、ならかみのうすきといふはかりを

詮とよめり。右は、始おはりこゝろさしをのへ

て、ちからいれるさま也。なとか勝侍らさらむ。

◇

◇

かみすき

うすゝみそめ―〔類〕薄墨染 夕くれ―〔尊〕〔類〕夕暮

しらかみ色―〔類〕しら紙色

きえはつる―〔類〕消はつる

見ゆる―〔尊〕〔類〕みゆる 秋―〔尊〕秋 夜―〔類〕よ

わすらるゝ―〔類〕忘らるゝ

うすきちきり―〔類〕薄き契

ゑせさい―〔類〕えせさい

かな―〔明〕〔類〕哉

ならかみ―〔類〕奈良紙

おはり―〔明〕〔類〕をはり

さま也―〔類〕さまなり 勝侍らさらむ―〔尊〕勝侍らさらん

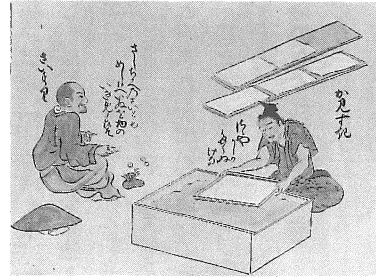
かみすき―〔白〕紙漣〔忠〕紙漣

かみすき―〔白〕紙漣〔忠〕紙漣かみすき 十九番

さゝやかしか  
たらぬけな。

さいすり

さしちかへのさいとも  
めし候へ。いぬを物の  
いきめも候そ。



さいすり—〔白〕簪摺〔忠〕簪摺

さいとも—〔白〕〔忠〕簪も〔明〕〔類〕さいも

いきめ—〔白〕〔忠〕いき目

### 【語注】

◎紙漉は、職人歌合に初出。

賽磨は、一般に、賽を作る職人とされるが、賽を作ること、はたして「賽をする」というのかどうか、疑問が残る。狂言で博奕打の名告に用いられる、鹿の角を「揉む」という言葉同様、「する」も、あるいは、博奕を打つ時、賽を揉む動作をいうのかも知れない。もしそうだとすると、「賽磨」とは博奕打のこととなる。いずれにしても、「賽をする」という用例を見出しえないので、想像の域を出ない。次に、「賽磨」が賽作りと考えられる点と、博奕打と考えられる点を、それぞれ列記しておく。

賽作りと考えられる点

① 本職人歌合「賽磨」の絵は、賽を売っている所らしい。絵の中の言葉も、「さしちかへの賽」、「犬追物の

いきめ」が未詳ながら、「く召し候へ」、「も候ぞ」は、明らかに、それらを売っている言葉である。

② 本職人歌合を基とする、菱川師宣『和国諸職絵尽』（貞享二年刊）の「さいすり」の絵は、賽を作っている所である。しかも、正に、砥石をもって仕上げている所。

博奕打と考えられる点

① 本職人歌合「賽磨」の月の歌は、『飛鳥井雅康 職人歌』の「さいすり」の歌を、ほぼそのままの形で踏襲しており、その『飛鳥井雅康 職人歌』の「さいすり」は、十二番本『東北院職人歌合』九番左の「博打」に対応する。

② 本職人歌合「賽磨」の、月、恋の歌とも、賽作りよりは、博奕打の歌と考える方が自然である。特に、月の歌の「目も消えはつる潰れ賽」、恋の歌の「似非賽」の語は、賽作りの歌としては不自然である。同じ恋の歌の「かたつきしたる」、「かくかひもなき」も、語義未詳ながら、博奕を打つことに関わっているように思われる。

③ 本職人歌合を基とする『誹諧職人尽後集』（寛延二年刊）「さいすり」の項所収の宗鑑の発句「帷子の四五六月の質布かな」は、博奕打の姿を詠んだものと思われる。『犬つくば集』にも「博奕打こそ寒げなりけれ／七粒の質布帷子冬も着て」の付合があり、「質布」は、博奕に負けた姿を象徴したのであろう。編者寥和は、「さいすり」を博奕打と考えていたかと思われる。

もつとも、賽を作る者と、それを用いて博奕を打つ者とは、あるいは、明確に分化していなかったか、または、分化していたとしても、一般にそう受け取られていなかった、という可能性もあろう。

紙漉と賽磨との関係も、未考。

◎すきかへしうすゝみそめのタくれ 「漉き返す」は、反故紙を溶かして再び紙に漉くこと。漉き返して出来た宿紙（漉き返し）は、もとの墨の色が残って全体に薄黒かったので、「薄墨」とも呼ばれた。「漉き返し―薄墨」から「薄墨染めの夕暮」と続く。「薄墨染め」は、布などを薄黒く染めること。ここは、そのように薄暗い夕暮の比喩。



ただし、月の歌であるから、夕暮の景色一般というよりも、夕空に焦点があると見るべきであろう。薄暗い空を「薄墨」紙と表現することは、『袋草子』等にも取られた。「薄墨に書く玉章と見ゆるかな霞める空に帰るかりがね」(津守国基) (後拾遺集、一、春) が有名。

◎しらかみ色に月ぞいてぬる 「白紙」は、白い上質の紙で、漉き返した紙に対して言ったもの。薄暗い空であったが、白紙の色のように、真白く明るい月が出た、というのである。

◎一か二か…… 『飛鳥井雅康 職人歌』四番左、さいすりの歌に、第四句、「われたに見ゆる」。

◎一か二かめもきえはつるつふれさい 一の目なのか二の目なのか、目も消え果ててよく分からないような潰れ賽。「潰れ賽」は、ここでは、磨滅した賽をいうのであろう。また、「一か二か」は、一の目が出るか二の目が出るか、と期待する言葉とも取れる。

◎それたに見ゆる秋の夜の月 そのような潰れ賽の目さえもよく見える秋の夜の月。秋の月の明るいことを言う。

◎我道をふかくいひたて、しかも月をもてなせり それぞれの職能をしつかり強調しながら、しかも題の月を大切に扱っている。序語注「よろつの道をたてたり」、二番語注「風を本にいひて月をもてなす心すくなし」の各項参照。

◎なすらへて為持 この種の句は、「かれこれ為準ふるに、これも持と見えたり」(中宮亮重家朝臣家歌合、花六番判詞)、「かれこれ為準ふるになほ持とす」(広田社歌合、社頭雪九番判詞)、「準へて為持」(六百番歌合、春上十六番判詞)など、歌合判詞の常套句。本職人歌合でも他に、「準へて持と申すべし」(二番月判詞)、「準へて持と申すべくや」(四十番月判詞)、「準へて為持」(六十九番月判詞)と用いられている。「準ふ」は本来、あるものが他のあるものに匹敵すると見做すことであるが、歌合判詞では、左右の歌を優劣ないと見做す意で用いられる。

◎わすらるゝ我身 相手に忘れ去られた我が身。

◎いかにならかみの 「いかになら(む)」の「なら」から、「奈良紙」と続く。「奈良紙」は、大和国高市郡、葛上郡、忍海郡(奈良県高市郡、橿原市、御所市)で作られた、楮を原料とする、薄くて柔らかな紙。室町時代初期か

ら、京都の上層階級の間で現在のトイレットペーパーやティッシュペーパーとほぼ同じ目的に使われた。室町時代を通じてその価は一帖わずか五文にすぎず、この紙の出現によつて、紙はようやく一般庶民の暮らしに入りこむこととなった。(以上、国史大辞典「奈良紙」の項)。枕詞的に、「奈良紙の」から下句の「薄き」に続く。

◎うすきちきりはむすはさりしを　いい加減な約束をしたわけではないのに。「契り」は、細かく破る、ないし、捻じ切るの意の「ちぎり」に通じ、紙の縁語。「結ぶ」も紙の縁語。

◎ねたやけに　「妬やげに」で、(つれない相手が)妬ましいことだ、本当に、の意。「妬や」に「寝たや」を懸けると見るべきか。「妬し」に「寝たし」を懸けた例は、「忘るるも苦しくもあらずぬなほのねたくもと思ふことしなければハ伊賀少将」(後拾遺集十六、雑二)などがある。

◎かたつき　「かたつき」は、『角川古語大辞典』の「肩付・肩衝」の第二義に、「角のところだが、肩をそびやかしているように角ばっていること」として、この例を挙げるが、そのような賽があるとは思われない。『日本職人辞典』に、「片付(特定の目がいつも出る)」「筆摺」の項)とするごとく、賽の目の出方が偏っていることを言うのかと思われる。そう考えると、次の「似非賽」ともよく照応する。その「片付」に、片思いの意味を響かせる。

◎ゑせさい　「似非賽」で、いかさまの賽を言うのであろう。「……似非賽の」で序詞。いかさまの賽を振らされて思い通りにならないように、と下句に続く。

◎かくかひもなまきめをもみるかな　こんなに(思いを寄せている)甲斐もない(つらい)目を見ることだ。「賽をかく」、または賽の「目をかく」という言葉があつて、「ゑせ賽のーかく」、または「かく甲斐もなきー目」と続くのであろうと思われるが、この点、未考。(天理本狂言「双六」に、「されば相手の上手は、必ず石なぶりして筆を打つ物なり。かるがゆへにかく、事を一大事と言へり。いくたびか、いても打つならば、やがて喧嘩にしなすつ……」とある。)その「かく」に懸けて、副詞の「かく」と言うのであろう。「目をも見る」の「目」は、賽の「目をかく」という言葉があるなら、その賽の「目」との懸詞とすべきだし、そうでなくとも、賽の縁語として用いられたと見るべきであらう。

◎始おはりこころさしをのへて 「心ざし」は、何かをしようとの意向、ないし、人や物に対する愛着というほどの意味であるが、判詞で用いられる時は、「猶待つも心もとなきに、音羽の山まで尋ね入りけむも、心ざしあるさまなれば」(俊頼朝臣女子達歌合、五番判詞)、「月を見る心ざしにてはあらで、関にとどめられて、心にもあらで見けんこそ本意なき心ちすれ」(元永二年内大臣家歌合、暮月十一番判詞)、「つねは、後の世に報いあるべきやうにこそ詠めるを、報いはなくて、なほ世々に深き心を見せん、とある心ざし、あはれなりなどきこえ侍り」(文治二年歌合、恋八番判詞)のように、歌の素材に対する作者の思い入れを指す場合が多い。これも、恋の相手に対する思い入れが、よく表現されている、というのである。ただし一方で、歌が博奕の世界にこそ寄せているので、判詞もそれに合わせて、まるで博奕を打つ時のように、終始強い意志に貫かれていて、というほどの意味を効かせたものと思われる。

◎ちからいれるさま也 「力入る(四段動詞)」、ないし「力(を)入る(下二段動詞)」は、「ともに力は入りて侍れど、いづれさだかに勝ち負けしとは申しがたきをや」(千五百番歌合、千二百七番判詞)、「左も力入れたるさまなり」(同、百四十七番判詞)のように、歌合判詞にまま用いられ、要は、力が籠もっているというほどの意味に過ぎないが、これも博奕にこそ寄せて、いかにも力んだ様子だ、と茶化したのであろう。

◎などか勝侍らさらむ このような強い調子の判詞も、「などか勝たざらん」(元永元年十月二日内大臣家歌合、残菊九番判詞)、「などか勝たざらん」(永緑奈良房歌合、郭公一番判詞)、「などか勝ち侍らざらむ」(六百番歌合、夏上廿四番判詞)のように、伝統的な歌合に珍しくはないが、ここでも前々項、前項同様、博奕を打つ時の心境にこそ寄せて言ったものであろう。

◎ささやかしかたらぬけな 「ささやかし」が不十分なようだ、というのであるが、「ささやかし」は未考。伊勢貞丈の『職人尽歌合詞書の内難解』には、「楮のあま皮を煮て、たたきて、こまかにする事を、ささやかすと云歟」とするが、『角川古語大辞典』は「製紙の際、すいた紙を張った枠を揺すって均質化する作業をいう」とし、『日本職人辞典』(「紙漉」の項)、岩崎佳枝『職人歌合中世の職人群像』第三章、三、遠藤元男『ヴィジュアル史料日本職人史

〔I〕職人の誕生古代・中世編』（一一四頁）なども、これと同様の説を取る。

◎さしちかへのさいとも 「とも」は、白石本、忠寄本、明暦板本、類従本は「も」。「とも」ならば「ども」と読むべきであろうが、「も」が自然なように思われる。「さしちかへのさい」は未考。「職人尽歌合詞書の内難解」は、「さしちかへのさい、詳ならず。双六の勝負にさしちかへといふ事あるなるべし。宴曲抄双六の部郭曲に、九条むしろのうちほうけさしちかへをやかまへまし、とあり」とする。『日本職人辞典』は、「さしちかへ」は明らかでないが、取替え用の意であろうか（「簍摺」の項）とし、岩崎佳枝『職人歌合中世の職人群像』は、「六面体の辺の寸法が少しずつ違っていて、ある目が出やすいようになってゐる賽のことであろう。まがい物を売っているのである」とする。また、『角川古語大辞典』は、「賽の目は一の裏が六、二の裏が五、三の裏が四であるのが普通であるが、この組み合わせを変えたものか」とする。なお、『難解』の引く宴曲「双六」は、「負博奕のおかしきは、集まりゐての言種ことよぎには、各利簍おろのを取り取りに、我先前ちかまにと争う数の下に、敷きつめられては古菰ふるもの、そも輔弱ぶじやくげに見ゆれば、九条筵こしよのうちほどけ、指違さしちがをや構かまへまし」。

◎いぬを物のいきめ 「いぬを物」は、「いぬおふもの（犬追物）」の転。御伽草子『玉藻前物語』に、「汝、那須野にてこれを狩りつる装束をたがへず、御前にてふるまうべしとて、赤き犬を一匹かけて出だされた□。当時までいぬおものいぬおものと名づけたり」とあり、下学集や易林本節用集に、「犬追物」、明応五年本節用集や黒本本節用集に、「犬追者イヌヲモヒ」などとある。「犬追物」は、竹垣で囲った馬場内に犬を放し、これを馬上からむま墓目ひまめの矢で射る武芸。「いきめ」は「ひきめ」の転か。ただし、「犬追物の墓目」が、賽磨とどう関わるのか、未考。伊勢貞丈は、「いぬ追物のいきめ詳ならず。古勝負の犬追物には、鳥目をかけ物にせし也。相手の矢数たがひに同じて持になりたる時は、さいのめを以て勝負をかたづけたる事など有し歟。犬追物の古書には見へず。如レ此の事は式正ならぬ事故、書にも記さざりし歟」（職人尽歌合詞書の内難解）とし、また、「犬追物ニ簍ヲ用ル事、犬追物ノ諸書ニ曾テ見エズ。勝負ノ犬追物ノ時鬮ヲ用ル事アリ。モシ鬮ノ代リニ簍ヲ用シ事ナドモアルカ。不レ審」（武器考證、十一）とする。『日本職人辞典』は、「いき目は墓目ひまめの変化で、犬追物に用いられる。……簍摺は、これをも作ったり売ったりしたもの

らしい「(簀摺)」の項」とする。

【絵】

紙漉は、烏帽子、直垂、袴姿。紙槽かみぶねの前に座し、腕捲りをして簀笥を持ち、紙を漉く。後ろに、乾燥させるために漉いた紙を張った張板二枚。張板と紙の描き方に諸本差がある。

賽麿は、剃髪し、直垂、袴姿。塗り笠を脇に置いて座し、右手に賽を持ち、それを左手で指さす。前に、賽を入れたと思われる袋と、賽四個。賽を売っている所と思われる。白石本、類従本は、笠は白のまま。

【参考】

○ 疲れたる競ひの馬を乗り替へて

石をもたつる双六の賽    △救済▽

○ 恨めしやその争ひの空車

打つ双六にかくる乗り物    △宗砌▽

○ 打ち出だす双六の場のそのままに

白と黒との石の乱れ碁    (頭証院会千句、七)

○ 賽を手に取りながらへるも口惜しや

裸にならばさていかにせむ    (兼載独吟百韵)

○ 仏の前に筒をこそ振れ

みやかしの油やみなに成りぬらん    (竹馬狂吟集)

○ 博奕打こそ寒げなりけれ

七粒の質布さいふ帷子冬も着て    (犬つくば集)

注解『七十一番職人歌合』稿(八)

○ 博奕打こそ罪は深けれ

七粒の賽の碛に輪廻して

(同)

○ まだまたうごになりはすまざず

打ちやみてのちも乞はるる博奕銭

(同)

○ さても美し博奕打なり

皇帝は后争ひ勝負して

(同)

○ ほうけて物を思ひこそすれ

博奕打つその身は野辺の土筆

(同)

○ 我が古箒を振り捨てて、くく、六じをさして出でふよ。是は、近江の国甲賀より出でたる者にて候ふ。某、若き時よりも双六に好き申せ共、度々の勝負に打ち負け、家財をも人に取られ、余りに浮世あぢきなく候うて、かやうの姿とは成り申して候へども、思へば余り無念に存ずる間、是より、関東に九郎蔵と申して、双六の上手のある由承りて候ふ間、罷り下り、此の人に習ひ、今一度双六を打ち返さばやと存じ候ふ。

(天理本狂言、双六)

○ 扱も双六の起こりと言つば、玄宗楊貴妃を寵愛し給ひし時、此の双六を作り出だす。盤の目を三十筋に割る事、は一ヶ月の日の数也。石の黒白は夜昼の色、二つの箒は日月、筒は須弥を表す。此の陰陽の道をもつて、双六は目出度き物となり。されば相手の上手は、必ず石なぶりして箒を打つ物なり。かるがゆへにかく事を一大事と言へり。いくたびかいても打つならば、やがて喧嘩にしなすつ、腰の刀に手を掛けて、しゆざんざらりとひん抜いて、三六かかりにかかるならば、くく、そのまま敵はよき手を使ひ、かいちがふてむんづと組んで、でつちと土に打ち付けられて、五六のやうなる棒撮棒にて、さん微塵に打ち付けられて、そのまま爰にてしのにけり、くく。地獄を住みかとしさうぞや。ござうを助けてたび給へ、ござうを助けてたび給へとて、かきふくやうにぞ失せにける。(同)

○ それそら言で候、わ上郎の手具足、狐の啼くか紺切れ、博奕打ちのさいめ切れ、裾や浅葱や榛の木染めや柿染め……

(虎明本狂言、どもり)

○是は、爰元走り回つて、心も直すくになひ者で御ざ有る。我らごときのいたづら者あまた御ざあるが、此の程寄り合あうて、鹿ししの角を揉もふで、揉もみ損やなふて、散々の仕合はせにて、何共致さうやうがおりなひ。

(虎明本狂言、三人がたは)

○将棋は差いたれど盤の上を知らいで、十二の賽さいわ揉もめど盤の上を知らいで、我われが殿御おんごは盤ばん双六しゅうりくの上手よ、上手ならは盤取り寄せて賽打さいうちとふ、おもしろいは盤双六の遊びよ

(田植草紙)

○われらの紙は四、五種類しかない。日本の紙は五〇種を超える。

(日本覚書、十)

○われらにおいては、すべての紙は古い布切れで作られる。日本の紙はすべて樹皮で作られる。

(同)

○われらは(インクを吸わせるために)紙の上に砂をまく。彼らの(紙)には墨スミがすぐすくに浸みこむ。

(同)

○いろいろの種類しゆの紙が、そのために植うえられた一種の木いの皮から作られ、日本における紙の用途は、さまざまなものの中で最も大きいたぐいに属する。それは日本に昔からあつたものではなく、同じ材料で紙を作る隣国のコーリア人から習まひ覚えたと思おもわれる。そして、コーリア人はシナ人からそれらを習まひつたが、シナ人がこの東方とうほうにおいて、というよりはさらに世界せかいにおいても、最初に紙しを發明はつめいした人々であつたと思おもわれている。その時代はシナ人がハン Han (漢) と呼よぶ王朝わうてうの時ときであつた。

(日本教会史、一卷七章)

○そこでまず紙しについていえば、その使用はエウロッパよりもこちらの方がはるかに古い。シナでは、この東方とうほうの他のどの地方よりも早くて、日本語で漢かん という今から千八百年前頃のハン Han 王朝わうてうにおいて、シナ人がこの紙しを發明はつめいした。

(同、二巻六章)

## 二十番 鎧細工 轆轤師

### 【職人尽】

(十二番本 東北院職人歌合) 十番右 轆轤引

注解『七十一番職人歌合』稿(八)

さやけきは秋をためしにひくすの露よりつたふそでの月かけ

右、上下よろしく侍るに、露よりつたふ袖の月影、今一しほの色をそへて、心くるしく侍り。仍右を勝とすへし。

君もこす我もかよはぬ中なれはろくろひきにてあはぬ恋哉

凡、彼是いつれも心有て、勝負弁かたし。但、左、今少おもひ入たる所有て、歌の姿まさりてや侍らん。

〔伝鳥丸光広作〕

職人歌合 具足屋 長陣を春の日をどす小桜はいくさに花を散らせせんため〔吾吟我集〕寄甲恋 内

甲今は忍びの緒を解きて降参しつつ思ひ晴らさん〔訓蒙函麁〕函人 よろひざいく〔長崎一見 職人一首〕十一番

左 具足屋 具足屋もきて見ん春の花軍人に負けじとおどしかけけり 左の具足屋の、おどしかけて花軍に勝たんこと、さも有るべし。……左の勝に而侍る。〔天团〕寄甲恋 うらめしやつらき言葉の戦ひに勝つて甲の緒を締めんとは

寄具足恋 よろひても具足の隙間あるものを思ふお敵はなかさぐらぬ〔人倫訓蒙函麁〕鎧 甲 胄 鎧 胄

惣名甲胄。今甲といふ字は甲なり。胄と用ゆる字はかぶと也。久しくあやまり来たり、通じて用ゆる也。具足といふ、

惣名也。胄脇立等の品々揃へたるを具足といふなり。下地、鉄にて作る。下地師外にあり。具足師、さまざまに塗り糸

をもつて威すなり。糸は、組屋、是を作る。別に組手あり。是を足打といふ。柄糸の打ちやうに同じ。女の所作なり。

着込 鎌 帷 共。鉄の針金をもつて造る。其の外色々あり。鯨の切れにてもつくる。大将分の人二用ゆ。〔用明

天王職人鑑 職人づくし〕折さへあらば折を得て、互ひに見まく星胄、具足屋弓屋もののみも、親子妹背は情知る、野辺

の木地屋の轆轤引き、引くや夕なの梳櫛屋……〔誹諧職人尽〕鎧細工 坂本二泊りて なめくじり這ふて光るや古具

足八嵐雪 三保野矢は首の骨こそ甲なれ八仙花 清水長谷川が絵馬を見て 草摺の唯今切るゝあつさかな八氷花 〴

卯の花のおどし手際やあさばらけ八涼龜 よろひ師は裸でさはく野分かな八連尺 老武者も具足の餅に居りけり

八寥和 〵 ろくろ挽 蓋挽の兔に角冬のあはせ貝八専吟 木地ひきの酔顔見たり山の色八沾涼 夏の日や乳母

が水波む錫ろくろ八東風 眠のつれなく見へし轆轤ひき八寥和 今様職人尽百人一首 具足師 革を矯め織の糸

は小桜に鞣しくさりのためしぬるかな 小札といひこれに至極だ「威のこさはか大事じや」「よい形に出来た。氣に



入らずばどこへも向くに」〔彩画職人部類〕甲ヨロイ 甲ハ 釈名ニ云、似リ物ノ之有ルニ鱗甲一。始テ作レ之ヲ人ノ異説多シ。続日

本紀ニ云、光仁天皇玉龜十一年八月勅シテ今革ノ之為レ甲。俗呼テ甲ヲ称ス具足ト。蓋此六具満足ノ通称耳。／ 轆轤

玉櫛箱根山中に温泉の湧出するところ七所ありて、七温泉と云ふ。此の山家に多くこの業をなすものあり。いづれの時よりといふ事を知らず。工み出だせる其の細工、至つて妙なり。槐樹、柞、梅、桜、神代杉をもつてす。是を江都には湯本細工とて殊更に称美す。文房几上飾りの具を始め、庖厨家飾に至るまで、好む所に随はざるはなし。是を挽物工ヒキモノといふ。〔職人尽発句合〕五十九番右 具足師 草摺や萌葱匂ひのこがね菊 草摺といふより、萌葱といひ、匂ひといひ、菊と受けたる句作り、詞のみにて心薄し。譬はば、賤の女の言はでもよき事までさえつりて、余情なきがごとし。

／ 三十六番右 木地挽 からびたる轆轤の音の荒寒し あら寒しといふ木地挽がすぎはひの脇目なきによて、右可為勝 「茂れる宿のむぐら椀」〔職人尽狂歌合〕よろひし 下戸上戸花に団子も打ち揃ひ具足して見る小桜威 ……右 四の句、いと聞きにくし。左論ナウ勝たるべし。〔今様職人尽歌合〕轆轤引 あだし名ぞ耳を貫く轆轤引く音をば常と

馴れし我が身も 右、轆轤の引綱、箱根の山に響くべけれど、左…勝つべし。「大寺の鐘を鑄て候ふに、大らかに轆轤引く音をさそへる小夜風に月さへまろくなりて出でけり」〔略画職人尽〕美しき袖の垣根に白糸の細工も目立つ卯の花威 〔宝船桂帆柱〕具足師 世の中の金が敵かなたを手に入れて身をかためたる具足師の業「勝つて曹のおめでや」

【本文】

二十番

このころのならひなりけり町かふと  
ほし見えぬまですめる月かけ  
うれしくもひきれにしたるつきの木の  
月のかけぬをこよひみるかな

注解『七十一番職人歌合』稿（八）

このころ―〔類〕此ころ なりけり―〔類〕成けり  
ほし見えぬ―〔尊〕ほしみえぬ〔類〕星みえぬ 月かけ―〔類〕月影  
うれしくも―〔類〕嬉しくも  
みるかな―〔尊〕見るかな〔類〕みる哉

両首共にあしからすきこゆ。仍為持。

し返しをむくひはいさやふるよろい

さねくくてこそわかれはてぬれ

いまはわれきれてぬるをさても猶

ろくろの縄のひくころかな

左右、ことなる難なし。あなかに毛を

吹てきすをもとむへからす。又持とす。



よろいさいく

しかへしの物は、

さねかしらか

そろはて。

ろくろし

木かたらて、

いそきの物

をそくなる。

いかへせむ。



共に〔類〕ともに

ふるよろい―〔忠〕〔明〕ふるよろひ〔類〕古鏡

いまはわれ―〔類〕今は我 きれけて―〔尊〕〔忠〕〔明〕〔類〕きれはて

ころ―〔類〕心

よろいさいく―〔白〕鏡細工〔忠〕井番鏡細工〔明〕〔類〕よろひさいく

しかへしの物―〔白〕エしかへし物

ろくろし―〔白〕轆轤し〔忠〕轆轤し

たらて―〔白〕たかうて〔忠〕たらうてたかうて

物―〔類〕もの

をそく―〔白〕〔忠〕おそく

【語注】

◎鎧細工は、月の歌や絵にも見るとおり、兜も作つたらしい。職人歌合に初出。

轆轤師は、轆轤を用いて、木製の食器類などを作る職人。古代宮廷の轆轤司の系統を引き、近世には木地師、木地屋と呼ばれた。十二番本『東北院職人歌合』十番右に轆轤引があるが、その月の歌は、数珠作りを詠み込んでおり、本によつては、職名も「数珠引」とあり、絵も、数珠作りの様を描いている。なお、轆轤師とほとんど重なると思われるものに、十七番左の挽入売があつた（十七番語注参照）。

両者の関係は未考。

◎このころのならひなりけり いわゆる倒置法で、「待ち胄」（次項）で「星見えぬ」（次々項）ことが、当世の流行だ、というのである。

◎町かふと 「町」は、語源からすれば、「待ち」と書くのが適當であろう。「待ちく」は、詠え物に対して、あらかじめ作つておいて客を待つ商品。「売りく」（十七番語注参照）と同様の使われ方をしたと思われる。すなわち、「待ち胄」は、出来合いの胄のこと。本職人歌合に、他に、「待ち鞆巻」（四十五番左、鞆巻切の恋の歌）、「待ち直垂」（五十八番右、直垂売の月・恋の歌）の例がある。当時、武器需要の拡大と相俟つて、生産の効率化が計られたのであろう。

◎ほし見えぬまですめる月かけ 胄の「星」に懸けて、天体の「星」を言う。胄の「星」は、胄の鉢を構成する裾開きの鉄板の端を捻り返して筋とし、その重ね目を留めた鉢の頭のこと。このような作りの胄を星胄と言い、古くは主流であつたが、合戦の形態が騎射中心から徒歩打物を主とするに至り、鉢の拡大化につれて、重量の軽減と製作の簡素化から、星を設けず、平頂な鉢で留めて筋だけを存続した筋胄が南北朝戦乱期に登場し、室町時代末期には筋胄が普通になつた（国史大辞典「筋胄」の項）。その変化を捉えて、「星見えぬ」と言う。そのように、星が見えないまでに澄んだ月影。月が明るくて、星の光が目立たないのである。この発想は、『前赤壁賦』にも取られた、文選所収の曹操の詩句、「月明星稀、烏鵲南飛」（短歌行）が著名。和歌では、例は多くないが、「昼かこそ霜の置か

ずは思はまし星みえぬまで照らす月影」（康平六年丹後守公基朝臣歌合）などがある。なお、「星見えぬ」について、『日本職人辞典』は、「店ざらしの宵の星なので曇っていて見ても見えない程である」（「具足師」の項）と解するが、いかが。

◎うれしくも 直接には、すぐ下の「挽入にしたる」に掛かると取り、うまく挽入が仕上がって満足しているのだ、と解するのが自然であろうが、同時に、下句の「月の欠けぬを今宵見るかな」に掛かると取り、月の美しさを愛でているのだと見るのが、月の歌の解釈としてはよからう。

◎ひきれ 挽入。十七番語注参照。

◎つぎの木の 「槻の木」は、樺の古名。堅くて木目が美しいので、家具、調度や建築の用材として好まれる。ここでは、同音の繰り返しによって、「月」にかかる枕詞として用いられている。ただし、上の句全体で序詞的に、いい具合に挽入にした槻の木のように、と下句に続く。なお、「槻の木」を枕詞に用いた例は、多くはないが、「槻の木」のいやつぎつぎの末までも代に仰がる影とならん（後宇多院）（続後拾遺集、十、賀歌）などがある。

◎月のかげぬ 上の句からの続きで、欠けることなく、まん丸く仕上がった挽入の器のように、月が欠けていない状態をいう。

◎し返しを 相手につらく当たられたことに対する意趣返しを（せむ）、の意か。「を」の意味が捉えにくい。意趣返しの意味の「し返し」に、鎧の「し返し」を懸ける。鎧の「し返し」は、『武器考證』十一に、「按、シカヘシトハ、何ニテモフルキ物ヲコシラヘ直スヲ云、『武家名目抄』七に、「按、しかへしの鎧は、著用の鎧ふるくなりて用に立かぬるを、もとの如くしかへ直せるをいふ也」とあるに従う。具体的には、職人の言葉からも察せられるように、鎧の札の一部を一旦ばらして、改めて威し直すのであろう。

◎むくひはいさや この「報ひ」も、意趣返しに取れなくもないが、相手が作者につらく当たった結果として、当然身に受けるべき禍い、という意味に取った方がよさそうである。現実には、作者の意趣返しによって、相手はつらい目を見ることになるのだが、そうなること自体、みずから招いた結果なのだ、という考えなのである

う。私にひどいことをしたその報いは、さてどんなものでしょうね、私は知りませんよ。

◎ふるよろい 「古鑑」は、仕立て直しをする古鑑で、枕詞的に下句の「さね」に続く。同時に、古くから馴染んで来た恋人を暗示していると見るべきかもしれない。そうすると、内容的にも下句の「さ寝さ寝て」によく照応する。

◎さねくくてこそわかればてぬれ 「古鑑」から、鑑の「札」に懸けて、「さねさねて」と言う。「札」は、鑑を構成する、鉄または革製の細長い板。「さ寝さ寝て」は、「さ寝」の連用形を重ねた言葉で、何度も寝ること。ここでは、男女がたびたび共寝すること。「川上の根白高草あやにあやにさ寝さ寝てこそ言に出にしか」(万葉集、十四、相聞)以外、ほとんど例のない言葉だが、鑑の札が数多く連なっていることからの連想もあつて、用いたものであろう。たびたび共寝したにもかかわらず、別れ果ててしまった。恋の歌の常で、相手の方が冷たくなったのである。「日本職人辞典」は、相手と作者の立場を逆に解釈する(「具足師」の項)が、納得できない。

◎きれてぬるを 諸本多く、「きれはてぬるを」。「きれはてぬるを」の誤写であろう。相手との関係が切れてしまったのに。ただし、「切れ果つ」という言葉は、通常、歌には用いない。

◎ろくろの縄のひくこころかな 「引く心」の「引く」は、自動詞で、現代語では「引かれる」というにあたる。轆轤の縄を引くように、相手に心引かれる、と言うのである。「引く心かな」という句は、「うらみても海人の綱縄繰り返し恋しき方に引く心かな△為家▽」(続後撰集、十四、恋)のように、歌の末句にまま用いられる。その際、「引く」は、「綱を引く」、「弓を引く」などの他、「舟の綱手縄を引く」、「注連縄を引く」の「引く」などに懸けて用いられるのが通例だが、「轆轤の縄を引く」の「引く」に懸けることは、勿論異例。

◎あなかに毛を吹てきすをもとむへからす 「毛を吹きて疵を求む」は、『韓非子』大体の「不<sub>レ</sub>吹<sub>レ</sub>毛而求<sub>二</sub>小疵<sub>一</sub>」などに基づく言葉で、些細な欠点をあげつらうこと。「左、大かた秋の月に雲のかからぬやうに聞こゆ。……右、秋より後のみな月の暗きやうに聞こゆ。……但しともに毛を吹く疵なり」(太皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合、月十二番判詞)、「右、……山めぐるとおかれたるこそ、さのみはいかにうけありきけるやらんとおぼゆるかたも侍れど、

これらは吹毛の難なるべし。……猶右の勝にや侍らむ」(建長八年百首歌合、三百八十九番判詞)などのように、「毛を吹く疵」ないし「吹毛」、また「吹毛の難」などの形で、歌合の判詞にまま用いられる。ここは、あえて些細な欠点をあげつらうべきではない、と言っているのである。ただし、具体的にどういふ点について言っているのかは明確でない。例によつて、歌合の判詞らしく見せかけたまでであろう。なお、ここには直接関係ないが、歌合判詞では、右のような原義に則した用法の他、些細な欠点であっても、歌合という性質上、問題にせざるを得ないという立場からする発言も多い。例えば、「歌合と撰集とは、ことかはるにや。歌合には毛を吹くことにや。撰集などには、このほどのことには歌がらめづらしければ許し侍るにや」(文治二年歌合、月八番判詞)がそうであるし、また、「今の世には吹毛の難のみ多く侍れば、世に従はでもいかがはと思つたまへて」(建久二年若宮社歌合、山居聞薦六番判詞)と言うのも、消極的ではあるが、歌合判詞のあり方を追認しているといふべきであろう。「左は、先にも侍りつる句の始めの文字も、毛を吹くにや見え侍れば、以右為勝」(広田社歌合、社頭雪三番判詞)、「左、吹毛なりといへども、見ゆる所あるによりて、以右為勝」(三井寺新羅社歌合、六番判詞)なども同様。本職人歌合五十七番月の歌の判詞に、「左右ともに吹毛の難も侍れば、歌がらさせる事なきによりて、為持」とするのはこの類である。

◎しかへしの物は…… 轆轤師に話しかけた言葉であろう。(絵) 参照。

◎しかへしの物 白石本は、「の」を脱す。

◎さねかしらかそろはて 「札頭」は、札の上部。部分的に威し直すので、札頭が不揃いになつて、うまく行かない、というのである。

◎木かたらて…… 鎧細工に話しかけた言葉であろう。(絵) 参照。

◎木かたらて 「たらて」は、白石本は「たかうて」、忠寄本は「たかうて」の右に「たらて」と校合。「たかうて」なら「高うて」と解すべきであろうが、意味が通じにくい。「たらて」の誤写であろう。木が足りないで。

【繪】

鎧細工は、剃髪し、直垂、袴姿に、腰刀を差す。二本の柱の上に渡した桁から鎧の袖を吊るし、その前に座し、右手にやつとこ様の道具を持つて作業する。しかし、顔は轆轤師の方を向いており、轆轤師と会話している体。膝の前に、小箱。中に札らしい物を入れる。同様の札らしい物、箱の前にも数枚。脇に、筋兜ともう一方の袖、兜か鎧の緒と思われる赤い紐二本。白石本、忠寄本、明暦板本、類従本は、膝の前にもう一本の紐。

轆轤師は、剃髪し、直垂、袴姿。轆轤の前に横向きに座し、手を休めている所。顔は鎧細工の方を向いており、これも会話の体。「木が足らで……」という言葉がよく合う。轆轤は、横軸轆轤で、軸の中央に紐が二本括り付けられており、軸の先端に細工物を取り付ける金具がある。助手が、二本の綱を両手に持つて交互に反復回転させるもので、『和国語職絵尽』の「ろくろし」や、『彩画職人部類』の「轆轤一」に、その様が描かれている。前に、製品の半挿、角盥、大小の皿数枚。白石本、忠寄本は、皿の種類を異にする。また、白石本、忠寄本、明暦板本、類従本は直垂の胸紐を描かない。

なお、明暦板本は両者の位置が他本と異なるため、両者が会話している体にはなっていない。

【参考】

○又、七条堀川に、四郎左衛門吉次とて、腹巻細工の上手有りける所へ行き、是は兵庫の守頼政の御使ひなり、御出仕の直垂の下に召すべき御用なり、黒糸緘の鎧腹巻、同じく左右の籠手、脛当ともに調へ参らすべし、引出物の事は望みのままなるべし、やが<sup>て奉行</sup>を申すべし、と言ひて、札を選び、かなも<sup>のを好</sup>みけり。雲に鳳凰の左右の籠手、白檀磨きの脛当、腹巻添へて、御奉行、御覽ぜよ、とぞ出しける。弁慶これを見て、大いに喜び、御前にて某着て、具足のかかりを見申し候はんとて、かの腹巻に小具足さしかため、件の太刀、刀、打ち刀共取り付けて、鉄鞭取り添へ、其の後、四尺六寸の太刀をするりと抜き、坪の中へ飛び出で、あら人切りたやと大声上げて、躍り上がり躍り上がりしけるが、懸りの桜をずんと切りて、仁王立ちにぞ立つたりける。吉次これを見て、思ひ出した

る事あり、此の間、三条の小鍛冶と五条の吉内をたらしたる法師の有りといふは、是なるべし、引手物こそ取らざらめ、切られて叶ふまじとて、急ぎ内へ入り、部遣戸の繫金をかけ回し、隙間より覗きければ、弁慶申すやう、苦しうも候ふまじ、出でさせ給へ、腹巻、今少し物輕に候ふほどに、ちと走りて見せ候ふべし、と言ひて、件のひらかけをさし履きて、築地を躍り越へ、前後の草摺をゆづり合せ、三度、築地を内外へと越えけるが、その後はいづくともなく失せにけり。

(弁慶物語、上)

○初春の、よき日緘の着背長は、みな小桜緘と成りにけり、扱又夏は卯の花の、垣根の水に洗ひ革、秋になりての其の色は、いつも軍にかつ色の、紅葉にまがふ錦革、冬は雪氣の空晴れて、兜のほしも菊の座も、みな華やかに緘毛の、思ふ敵を打ち糸の、永く我が名を揚巻や、後ろを敵に見せざれば、是ぞ嘉例の御鎧、扱家路に帰りつつ、大筒酒海据へ並べ、一家一族内の人、謡酒盛り舞ひ遊び、扱物の具は唐櫃や、劔を箱に納むれば、弓は袋を出ださずして、国も豊かに民栄へ、治まる御代と成りにけり。

(天理本狂言、鎧)

○われらの武具は非常に重い。日本人のは非常に軽い。

(日本覚書、七)

○われらの武具はすべて鋼鉄製である。彼らのは、角または革の薄片を擦糸で縫い合わせたものである。

(同)

○われらの兜の羽飾は、白色または褐色で、非常に美しい。日本人のは、牡鶏の最も長い尾の羽である。

(同)

○われらの(兜)には面頬がついている。日本人は、顔に悪魔の半面をつける。

(同)

○われらの兜は円い。彼らの中には板金製の耳と首がついている。

(同)